様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月　31　日現在

機関番号：34416
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20720069
研究課題名（和文）
　Ｖ・Ｓ・ナイポール再考—初期作品を中心に
研究課題名（英文）
　Rereading V. S. Naipaul’s Early Writings
研究代表者　小澤　自然（OZAWA SHIZEN）
　　関西大学・文学部・准教授
研究者番号：40361406

研究成果の概要（和文）：本研究では、Ｖ・Ｓ・ナイポールの初期作品に含まれる文化的異種混淆性についての考察を行なった。2008 年から 2009 年度にかけては、彼が作家としての本格的なデビューを飾る前に関わったイギリス BBC の文芸番組 “Caribbean Voices”についての調査を行ない、この番組との関係が彼の事実上の処女作 *Miguel Street* に果たした影響について考察し、学会発表を行なった上で、論文にまとめた。また 2010 年度には、ナイポールの中期作品群の出発点に位置する旅行記 *The Middle Passage* について分析し、学会発表を行なった。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I tried to tease out cross-cultural elements in V. S. Naipaul’s early writings.　In the academic years 2008 and 2009, I conducted research on the relationship between the writer and the BBC’s literary programme Caribbean Voices.　I read a paper on this topic in an international conference and published one article.　In the academic year 2010, I presented a paper on Naipaul’s travel writing *The Middle Passage*, focusing upon how his cultural position in this work shifts from that of earlier writings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英語圏文学

１．研究開始当初の背景

　応募者はラドヤード・キプリング研究から出発した。この研究の根幹には、大英帝国の植民地支配が生み出した異文化接触によって出現した、文化的異種混交性についての強い関心があった。応募者の従来の研究は、異文化接触の現場にあって多様化する人々のアイデンティティのありようをキプリングがどのように捉え、作品に描いてきたのかを考察してきた。

　本研究ではこの業績を土台として、ポストコロニアル時代にあってより一層多様化す

るアイデンティティの問題について考察したいと考え、ポストコロニアル文学の先駆者で、2001年にノーベル文学賞を受賞したV・S・ナイポールの文学の初期作品を研究対象とした。

V・S・ナイポールに関する従来の研究は、1980 年代に確立されたポストコロニアル理論の影響を強く受けつつ、遡及的に展開されてきた感がある。こうした研究においては、彼の中期・後期の作品をもっぱら取り上げ、自らの非西洋的な出自にもかかわらず非西洋世界を西洋の視点から断罪する彼の姿勢を批判的に論じる傾向が強かった。だが彼の初期作品には、故郷トリニダードをコミカルに描く興味深い小説が多々ある。にもかかわらず、傑作といわれている *A House for Mr.Biawas*(1961)を除き、これらの初期作品は中期・後期作品のための習作的な位置づけをされるにとどまっている。

日本国内における研究状況もこうした傾向を踏襲しており、『神秘な指圧師』(*Mystic Masseur*) (1957)『ミゲル・ストリート』(*Miguel Street*)(1959)がここ数年のあいだに翻訳出版されたものの、ナイポールが論じられるときには、中期以降の活動を特徴づける彼の旅行記が取り上げられることが圧倒的に多い。

このような評価の原因は、ナイポールを捉えるさいの概念的枠組みにある。西洋中心主義に対し(旧)植民地の立場から異議を申し立て、今日の世界の不平等を改善する志向をその最大の特徴とするポストコロニアリズムのパラダイムにおいては、脱植民地後の非西洋世界に対して批判を展開する中期以降のナイポール作品は、単なる西洋中心主義者としてしか理解されえないのだ。

しかし、ナイポール自身はその初期活動期において、西洋中心主義とは言い切れないような作品群を世に送り出し、後の作家たちに多大な影響を与えている。このようなポストコロニアリズム黎明期に先駆的な役割を担ったナイポールの初期作品を看過して、中期・後期作品のみを批判する、従来の国内外の研究は見直さなければならないと考えたのが、本研究の出発点であった。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、カリブ海トリニダード・トバゴ出身のインド人系作家V・S・ナイポールが、その初期活動期にあたる 1950 年代・60年代に発表した一連の作品を、「距離」と「場所」をキーワードとしながら、そこに見られる文化的異種混淆性のありようについて分析・考察することにあった。本研究は、英語圏ポストコロニアル文学の黎明期にあって、脱植民地化によって多様化するアイデンティティのあり方をその文学のテーマに据えたV・S・ナイポールの先駆的役割について、文学的および文化史的観点から明らかにしようと試みたものである。

３．研究の方法

本研究では、ナイポールの初期活動期にあたる1950年代・60年代の作品、およびそれらの作品が生まれた文化史的状況に焦点をあてた。ナイポールは1950年に政府給費生としてオックスフォード大学に留学し、卒業後もそのままイギリスに滞在、1957年に処女作『神秘な指圧師』を出版し、1958年に *The Suffrage of Elvira*、翌年に『ミゲル・ストリート』を続けて出版する。そして初期の傑作と言われる *A House for Mr.Biswas* (1961)によって、新しいタイプの作家としての名声を不動のものにした。これらの作品に特徴的なのは、イギリス「本国」の読者の理解を求めつつも、題材とした「故郷」トリニダードを深い愛情を持って描いていることである。このような創作態度が示すのは、コロニアルVSポストコロニアル、もしくは「中心」VS「周縁」といった二項対立では捉えきれない、彼の文学の在り方である。

そこで、このようなナイポールの文学の特徴を分析するにあたって「距離」と「場所」というキーワードを設定した。ナイポールは「本国」イギリスに身を置きながら、「故郷」のカリブ海を舞台にした作品を書くことから出発した。しかも、そういった作品を書いているあいだに、「本国」イギリスBBCの伝説的ラジオ番組 “Caribbean Voices” に携

わっている。カリブ海地域出身の作家たちにとっての数少ない作品発表の機会に、彼は積極的にコミットしていたのである。このような彼の初期の活動は、ポストコロニアル批評の枠組みにおいては文化的変節者として捉えられることの多いナイポールの複雑さについて、根本的な再考を促すものといえる。

そこで本研究では、従来ほとんど解明の進んでいなかった、“Caribbean Voices”におけるナイポールの役割と貢献をアーカイブ調査によってできるかぎり明らかにすることを試みた。

さらにその調査結果を踏まえたうえで、彼の事実上の処女作である『ミゲル・ストリート』に、ナイポールの文化的立ち位置がどのように表れているのかを、「距離」と「場所」という観点から具体的に考察した。彼の文化的ポジションをこのような角度から検証することによって、多様化するアイデンティティのあり方を彼の文学がいかに描いてきたのかを、実証的な形で、かつ文化史的な文脈を踏まえたうえで明確に示すことを目指した。

さらに、中期の活動の始まりを告げる *The Middle Passage*(1962)を研究対象に含め、ナイポールの初期と中期のあいだにある「断絶」について、その意味を考察した。これは、ナイポールがどのようにしてみずからの文化的位置を新たに定位していったのかを考察することによって、ナイポール文学における「距離」と「場所」の問題を多角的に捉えらることを目指したものである。

４．研究成果

まず研究に着手するに当たって 2008 年度は先行研究の整理から始めたが、その結果イギリス BBC のラジオ文芸番組 “Caribbean Voices”がどのような番組だったのか、そしてナイポールがこの番組にどのように関わったのかが、あまり明らかになっていないことが判明した。そこでこれらの点を明らかにするべく、夏季にイギリスに渡航し、BBC のアーカイブでこの番組のスクリプトをできるだけ読み込み、年度の後半はさらにその分析を行なった。

2009 年度もこの分析を継続したが、その結果、さらなる調査が必要であることが判明したため、夏季に再度イギリスに渡航し、資料収集・調査を行なった。その結果明らかになっってきたのは、ナイポールの事実上の処女作である『ミゲル・ストリート』が、当時の“Caribbean Voices”に強く影響されている可能性があることであった。そこで、初期のナイポールが、同時代に出現しつつあった英語圏カリブ海文学のコンテクストに深く関わっていたことを、『ミゲル・ストリート』の分析を通じて論じた論文を執筆し、10 月末に国際学会で発表を行なった。発表後は、この論文をリバイズし、予定されていた学会の論文集に投稿した。（この論文は次年度に出版された。）

本研究の最終年度に当たる 2010 年度は、前年度までの研究成果を受け、ナイポールが 1962 年に発表した *The Middle Passage*(1962)についての分析を行なった。*The Middle Passage* は、この作家の初期の代表作 *A House for Mr. Biswas*(1961)の後に発表された旅行記で、彼の中期の文学活動の幕開けを告げる作品だと一般的には評価されている。彼の初期の作品がポストコロニアル的な枠組みに典型的に当てはまる作品だとすれば、この旅行記は、西洋的な価値観を基準として、宗主国からの独立を控えていたカリブ海諸国の文化的混乱を批判したものとして論争を呼んできた。本年度は、いまなおナイポールの評価を二分する原因となっているこうした従来の読解がどこまで妥当なものなのかを、自分なりに再検討した。また、新たな段階の文学活動を創始するにあたって、旅行記という自伝的な要素を強く持つジャンルの文学をナイポールがいかに利用したのかということについて考察した。

具体的には、*The Middle Passage* 中でナイポールが言及しているヴィクトリア朝期イギリス人の旅行記のカリブ海地域の表象と、ナイポール自身のカリブ海への眼差しの関係に特に着目し、夏季にイギリスに三週間程度渡航し、British Library にてこの点についての調査・考察を集中的に行なった。この成果に基づいて、帰国後に学会発表用の論文を英語で執筆し、9 月下旬に国際学会で発表

を行なった。なお、この研究については再考の余地がまだまだ残されており、この学会で得たフィードバックを踏まえて論文をリバイズしたうえで、今年度再度国際学会にて発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

1. Ozawa, Shizen. “Returning Only in Order to Depart: On V. S. Naipaul’s The Middle Passage.” “Travelling South: The Sixth Biennial Conference of the International Society for Travel Writing.” University of South Carolina, 23-26 September 2010

2. Ozawa, Shizen. “‘Looking only at My Shadow before Me’?: On V. S. Naipaul’s Miguel Street.” Mapping the World: Migration and Border-Crossing. National Sun Yat-sen University, 31 October - 1 November, 2009.

〔図書〕（計１ 件）
（共著）

Ozawa, Shizen. “Mapping, the City, and Naipaul’s Miguel Street.” *Mapping the World, Culture, and Border-crossing*. Eds. Steven Tötösy de Zeptnek and I-chun Wang. Kaohsiung: the Center for the Humanities and Social Sciences, National Sun Yat-sen U, 2010. (162 pages.) 127-138.

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小澤　自然　(OZAWA SHIZEN)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：40361406